
帝国魔術部零番隊

桜 子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝国魔術部零番隊

【Nコード】

N1912H

【作者名】

桜子

【あらすじ】

能力や性格に問題アリ。本来あるはずも無い部隊、それが帝国魔術部零番隊。若い隊長とその部下達が、さまざまなミッションの解決に挑む。個性的な面子と能力、そしてチームワーク(?)を武器にして、今日も無理難題を(主に力業で)解決する……はず。

序幕

帝都ウシュルナギの朝は早く、夜は遅い。

人と人が混ざりあい日々成長する都は、眠りにつくことなく刺激を与え続けてくれる。

夜更け夜明けの境目がどこまでも曖昧で、いつしか商業刻限は形骸化していた。

そしてこの日の夜も、帝都の喧噪は変わらなかった。

悲劇も喜劇も飲み込む帝都 ウシュルナギ。

およそひと月ぶりにウシュルナギを潤した雨は、舗装の悪いスラムの通りを悪路に変えた。

表通りでは埃が洗い落とされて清々しいだろうが、こちらはなにせ事情が違う。

人々は家を造るために敷石をはがし、お金を得るために排水管を奪っては売った。

貧しさは帝都の姿を変え、階層隔離を生み出したのだ。

空が洗われ、こんなに星の瞬きが綺麗な夜にも、スラムの住人の目の色は暗い。

彼らの瞳は、表通りのにぎわいを妬んだものなのか。

「ああー、もうイヤ！ お氣にのブーツがドロドロになっちゃったよー」

そんなスラムの通りにおいて、この少女だけは星明かりがよく似合う。

いや、むしろ、広い帝都を探してもこれだけの美少女は簡単に見つからないだろう。

短く切りそろえたショートボブから覗く顔は、まぶしい若さの光に輝く。

すらりと伸びた四肢と、女を声高に主張する乳房は、地味な灰色のロングコートからでも官能的だ。

愁いを帯びた瞳の色は、夜空の星々さえ敵うことはないだろう万華鏡である。

大人の女性と少女の境に、長崎ネネは輝きを放っていた。

「ねえキリヤさん、おんぶしてちょうだい」

そう言っただけ甘えるネネは、やはりまだまだ少女であるのか。

長崎ネネ 16歳 先日、帝立魔術学院を飛び級で卒業した逸材である。

もう軍人になったというのに、あまり自覚は無い様子である。

「こつちが近道だつったのはお前だろ、アホ言ってるんじゃないか」
少女とそろいのコートを着た青年は、彼女より10は年上に見える。

少女のそれと同じ色の黒髪は、生まれつきのツンツン頭。

背は高い。ガタイもいい。ついでに顔も険しい。ポケットに手を突っ込んだ態度は、どこまでも不遜だ。

小さな子供には好かれない男の名は、新庄キリヤ。長崎ネネの上司である。

「おい、本当にこつちで合ってるんだよな？」

部下の情けない泣き言は無視して、キリヤは不機嫌そうに聞いた。
この泥道に辟易しているのは彼も同じであった。

「うえーん、ひぐつ。ああ、それは大丈夫ですよ。都市戦模擬演習の時間にここは通ったことがあります」

歩幅の違うキリヤに追いつこうと頑張りながら、ネネは答えた。

「わたしは覚えるのはととととと……、覚えるのは得意ですから足を取られながらも自慢げに胸を張るネネ。キリヤは大盛りのそれに目をとられ、すぐに逸らした。

異例の飛び級卒業をした天才、それが帝国魔術部内でのネネの評価だ。

だが実際には、その記憶力と強運で筆記、模擬戦試験を最高点で

通過したわけである。

魔術の腕自体はまだまだ発展途上だし、経験値も足りていない。危なっかしくも堂々とした足取りは、彼女の華々しい経歴のようだとキリヤは思った。

「確かに、着いたようだな……」

キリヤは目的の建物の前に来て、その歩みを止めた。古びたが立派な構えのレンガ作りの館は贅沢にもガラス窓だが、明かりは一つも灯っていない。

キリヤはマッチの火を使って、右腕の時計を覗いてみた。予定時間より7分早く着いていた。

マッチは吹き消し、ぬかるみ道に捨てる。それから隣で息をそるえるネネを見て、次いで周囲を見渡す。

先ほどから警戒は怠っていない。新人のケアは先輩の務め、更にいえばここはスラム街。

そして、スラムには似つかわしくない見事な館。

「表通りからだだと大教会に隠れちゃっているんですね。帝都でも知らない人は多いと思いますよ」

ネネが言っているのは帝都で最古の教会のことだ。

主の威厳を保つため、主の威光を利用するため、宮廷ですらその高さでは教会堂には敵わない。

背の高い教会の背後に隠れたその館に、下々は見上げるだけでその存在には気がつかない。

巧妙に都市に隠されたそれは、いわば帝都裏社会の中核である。

「坊主に都建部に有産貴族にと……。ずいぶんバラまいてるんだろうな」

何度来ても貧乏人のひがみは消えない豪奢な作りに、露骨に顔をしかめるキリヤ。

「都市開発部や建設部は皇帝直属機関でしたよね？ 賄賂なんか通じるんですか？」

キリヤの独り言に対して、素朴な疑問をしたネネ。

血のにじむ努力の末、魔術に関しては一流の域に近づいたが、まだまだこの世界の常識には疎いようである。

それを理解しているキリヤは、かつて上官にされたようにネネに説明した。

「今の皇帝が戦争好きってのはいいよな。そうするとやっこさん、軍事にかまけて他がお留守になる」

この隙に他の部署を合法的にのっとりた官僚や貴族は、払った賄賂を賄賂で取り戻そうとする。

それを聞いたネネの反応は、とても素直なものだった。

「イヤな話ですね」

ばれなければ合法だった。最近の新聞で見出しを飾った官僚の言葉である。

ネネも嫌悪感を露にするが、キリヤのそれとはベクトルがちがう。だからキリヤは苦笑いした。

この娘も、その性格で大分苦労した末にウチにやって来たのだから。

自分や仲間達の苦い経験を思い出さずにはいられなかったキリヤである。

口に出しては言えないが、かわいい部下を優しく見つめるキリヤ。そして、いよいよ今晚の本題に入った。

「今回は要救助者の奪還が任務だ。他は捨てる。判断次第で俺はお前も捨てる」

もちろんその言葉の裏は、その時は俺をおいて逃げると云うもの。空気がり、神妙にうなずくネネの顔は、年相応の緊張に固くなっている。

悪くない。命知らずは死ぬが、恐怖を知るものはまだ可能性がある。

キリヤは一度、ネネの肩を叩いた。強く、優しく、励ますように。「さて、最後の確認だ」

予定時間まで、あと3分。

長崎ネネの帝国魔術部零番隊としての、初めての任務である。

一 少女と上司

帝都には、名も無い古びた館がある。

それは、教会の裏であり、スラムの隅にも位置する場所。

どちらにしる場違いにも程があるそれは、一体いつからそこにあるのか。

表通りにもなかなか見られない立派な造りは、闇の中にこそふさわしい。

スラムに囲まれ、一般人には知る由もないそれは、黒い権力の利害が交錯する場である。

当然、そこから出てくる人間は皆一様に後ろ暗いのだ。

先ず館から出て来た男は、周囲を素早く警戒した。筋骨隆々とした大男の、その目は暗く、鋭い。

やがて、連れ立って三つの人影が合流した。

二人は中背だが、ひとりはそのに比べてずいぶん小柄である。

一人は右目が陥没し、もう一人はフードで顔を覆っている。

近づいてみれば分かるだろうが、フードを被ったもう一つの小さな人影は微かに震えていた。

もつとも、それに気づいている三人の男達は何事も無いように振る舞っている。

この館を場所に指定する人間なのだ、商品に同情するようなことは無い。

彼らはもし商品が騒ぎだしたら、手を上げるのにも躊躇しない。

自らの危険を感じたら、ためらわずに盾にだってするだろう。

警戒を決して怠らず、その顔はまごうこと無き戦士である。

後から出て来た彼らも素早く周囲を警戒する。

前方を見て、右、左、そして再び右。

奇襲をかける時は呼吸の間をつく。

行動と行動の継ぎ目を狙え。
キリヤはそれに徹していた。

キリヤは館の三階、出窓の部分から音も無く身を躍らせた。
まるで友人の肩を叩くかのように、大男の頭頂部を肘で狙う。
ゴリツと嫌な音がして、大男がゆっくりゆれる。残りの二人は事
態の把握に、さして時間を要しなかった。

激高した右目が雄叫びをあげながらキリヤに突っ込み、フード男
は着地の瞬間の隙をうかがう。

二人の選択は概ね正しい。落下エネルギーを持ったキリヤは、着
地とともにその身に衝撃を受ける。

肘打ちを食らった男が倒れ込むより先に、キリヤの足が地面に届
く。

その刹那、キリヤの足下に奇妙な紋章が浮かび上がった。

二人の頭に、祈紋師という言葉が浮かんだ。

二人の判断は概ね正しかった。

失敗は、キリヤが単独犯だと決めつけてしまったこと（あの一瞬
ではまあ、仕方ないかもしれない）。

もう一つ、キリヤ（達）が魔術師であったこと。それは彼らにと
って大きな誤算だった。

キリヤの足下から浮かび上がった紋章は、美しくも奇妙なものだ
った。

歯車状の円が浮かび上がり、その歯の一つ一つに見たことも無い
文字列が生物のようにつながり、つながっている。

円陣と文字列が、キリヤの足下に収束し、キリヤのつま先がそこ
に降りる。

その瞬間、円の収束地点から強烈な光が発せられた。

魔術を知るものなら理解ができたかもしれない。その光は、ただの祈祷紋の反応光にしては強すぎる。

「野郎、何か仕掛けてやがる！」

意外に反応できたのは、突っ込んで来た方の男だった。

彼の左目は、右目を補って光に敏感になっていたのだ。

右目が陥没した男は、閃光から目を守るとフード男に警戒を促した。

「うぐっ」

しかし、キリヤの動きを凝視していた男は閃光に目を焼かれていた。そして、キリヤの拳を受け、泥道に沈む。

右目は既にフード男を捨てていた。いかにキリヤを殺すかに集中していた。

光に過敏になってしまった左目をかばい、キリヤの気配を探る。

必ず殺すと、殺意に渦巻いていた。

だが、彼らとキリヤとは、やるべきことが違っていた。

もっとも、右目が本来の目的を忘れていただけなのだが……。

光がようやく止む頃には、キリヤと小さなフード姿はいなくなっていた。

作戦はあまりにも見事に決まったが、ネネは不満たらたらだった。「なーんか、キリヤさんだけかっこいいところ持ってっちゃったって感じですね」

初めての零番隊での任務は、16歳の少女には退屈なものだったのか。

サングラスを遊びながらながら、下手すれば懲戒免職モノの言葉を口にする。

そんなネネに対して、キリヤはどこまでも冷たい。

コートのポケットに手を突っ込み、ぬかるみ道を歩いている。

「んなこと言ってるうちは、大事は任せられねえ」

隣を歩く少女を子供扱いするキリヤだが、訳の無いことではなかった。

「面割れせずに救出できたんだ、何が不満だ？」

ようやくフードを外した小さな人影は、それはほっそりとした少女だった。

ネネも腕や腰こそ細いのだが、女らしいというかエロいと言うか、まあそんな体だ。

彼女は先ほど男二人を一瞬で叩きのめしたキリヤと、歳は近いのに胸が殺人的なネネにビビって萎縮している。

「わたしの初任務！　なのにやったのは魔術学院の初等術と中等術！　だけ！」

「一番隊でも任務はあっただろうが」

「わたしは零番隊です！　ついでに言えばキリヤさんの部下です！」

「……何が言いたい？」

「もっとこう、わたしもカッコいいことがしたかったです！　それと、労ってください！」

もうすぐスラムを抜けて表通りに出るのだから、騒ぐ分は大目に見ようと思うキリヤ。

表通りはこの時間も騒がしく、うるさいネネはかえって風景になっってしまう。

ただ、くたびれた女の子を連れた男が、美しい少女に責められている。帝国魔術部の隊長には、まあ見えない。

かえってやりやすい状況であるのは確かなのだが。

「おまえはよくやってくれたよ」

キリヤは本心からそう言った。

あの状況なら、ネネ一人でも制圧できたかもしれない。しかしキリヤは安全策をとった。

三階の出窓にネネを待機させ、キリヤの落下と同時に祈祷紋を編ませる。

祈祷紋には閃光と衝撃吸収の二つの祈りを込め、着地の寸前に発動させたのだ。

「タイミングも衝撃吸収も発光も、どれも完璧だった。実地でいきなりあれだけやれる新人はいない」

「そうですか！？ そうなんですか！？」

「そうだから少しは落ち着け」

「はい」

スキップでもしかねないネネを見て、顔をしかめるキリヤ。すれ違当着飾った金持ち達の視線が痛い。

泥だらけのコートを見て、それでもまだ仕事が残っていることに気がめいってしまいそうだ。

もう、さつさと眠りたかった。

キリヤはもう片方の、背が低い方の少女を見ていった。

「これから陳述を貰うから、もう少しだけ付きあってくれ」

「……はい」

死刑でも宣告されたような顔した少女を見て、更に気が重くなるキリヤだった。

二 華族と零番隊（前書き）

しばらくは世界観の説明が多くなります。
上手に説明できるよう、勉強中です。

二 華族と零番隊

「時任カスミです」

汚れたコートを纏った少女のひとことで、キリヤはどつと疲れた。彼らがいるのはウシュナルギ官庁街の一角にある帝国軍総本部、そのなかの魔術部事務所であった。

時間はとつくに午前4時を回り、早番の兵士や魔術師が廊下を行き交っている。

ついでに言えば、未だにシャワーさえ浴びていないキリヤは泥だらけの軍服に辟易していた。

更に部屋の脇のソファには、部下のネネが上司である自分を差し置いてぐっすりと眠っている。

そして目の前の少女は、明らかに自分を見てビビっている。そんでもって極めつけは”時”の字だ。

悪い夢なら覚めてくれと、あくびをしながら願うキリヤであった。「へー、君が時任カスミちゃんか。ふんふん、悪くない。あと4年と125日か。俺は前野タクマ、よろしくな」

「おいこら、華族に手え出すな」

キリヤは珍しく早番をサボらなかつた部下をたしなめる。あの悪質な指令書はこれを見越しての判断なのか。

思わず頭を抱えたくなるキリヤであった。

「華族も貴族も関係ないツすよ。かわいい女の子は等しく愛でるのが俺のポリシーツすから」

「だったらあっちにしとけ」

そう言つてソファに寝そべるネネを指差すキリヤ。もちろん起きる気配はない。

「ネネちゃんは後で、今はカスミちゃんに惚れてるツすから」

タクマは適当に答えながら再びカスミに話しかける。もともとキリヤの相手をするつもりはなかつたようだ。

職務放棄になるけど、寝ちまうかな……そんな不埒な考えがキリヤの頭に浮かぶ。

「タクマ、今日の早番はおまえと誰だ？」

「赤石のじいさんッすよ」

「そうか、ならおまえはしばらく仮眠とっついていいぞ」

「マジっすか！？ 俺、今初めてキリヤさんの部下になれて嬉しかったッす！」

そう言いながらタクマはネネのソファにこっそり上る。見なかったことにしようと決めたキリヤであった。

そして再び時任カスミに向き合った。

「それじゃあもう一度聞くが、あんたの曾じいさんの名前はなんだ？」

「はい、時守^{トキモリ}ユキチ……です……」

帝国の皇帝の姓は代々時守である。つまり、この少女は皇族の血を引くやむごとないお方なのだ。

帝国において、貴族とは様々な分野で帝国ひいては皇帝に貢献した者に贈られる称号だ。

彼らは種々の特権を皇帝から直々に受け、条件付きそれらは世襲されることもある。

そして、その貴族でさえ頭を下げなければならない存在。皇帝の血を引くもの、それが華族だ。

時の字は偉大なる血脈の証、勝手に名乗ればそれだけで一族郎党の首が飛ぶほどの権威がある。

ちなみに、華族の跡取り息子に流れ弾を当ててしまった将校が打ち首となった事件が少し前にあった。

でっぷりとしたガキが腕に巻いた包帯をこれ見よがしに喚いていたことを、キリヤはよく覚えている。

「あの……ご、ごめんなさい……」

カスミがしくしくと泣き出した。そこに来てキリヤは自分がどんな顔をしているか、事務所の鏡を見て青ざめた。

「あああつ、すまん、泣かないでくれ！ 別に怒っちゃいけないから、な？ な？」

「くすんつ、ふえ、ふえ〜ん……」

ヤバい、冗談じゃなく俺の首が飛ぶ！ 命の危機をリアルで感じるキリヤは、なんとかカスミを宥めようとした。

「ほらもう泣かない、ね？ そうだ、ケーキをあげるから！ うちのアホが買ってたとしておきのだ。美味しいぞお」

もう文字通り必死のキリヤであった。

「くうおら、ガキを泣かしてんじゃねえ」

スパコーンとキリヤの頭を叩いたのは、零番隊の最古参、赤石オキノブであった。

「ああつ、赤石さん！ ちょっと聞いてくれよ！」

「あー、だいたい事情は分かったから落ち着け」

キリヤが零番隊に配属される前から副隊長を務めていた老人は、一切のデスクワークを取り仕切る切れ者である。

魔術の腕は落ちたものの、その知識と人脈は零番隊の屋台骨をしっかりと支えていた。

もつとも今は部下に仕事を任せ、コーヒー片手に事務室でまったり過ごすことも多いのだが。

「カスミちゃんっていったかい？ ほれ、儂と甘いものを食おうか」
孫ほど歳のはなれた少女に優しく接する姿を見て、キリヤは赤石がこれほど頼れる人だったのかと感動していた。

既に泣き止んだカスミは、赤石の不器用な冗談にクスリと笑っている。

「おい、てめえは紅茶くらい入れて来い」

朝っぱらからモンブランを食べる羽目になった老人は、不機嫌そうに言った。

目を覚ましたネネが騒いだりタクマが死にかけたりしたが、キリ

ヤは調書を取り終えて一息ついていた。

ようやくシャワーを浴びると時刻は6時にほど近く、もう仮眠をとる気も失せたキリヤであった。

カスミは取り調べが終わるとすぐに眠りに落ち、今は事務室のソファに寝かせてある。

「華族っていつても、寝顔はかわいらしいですねー」

ついさつき先輩であるタクマを叩きのめしたネネは、キリヤの側に立って寝入った少女を眺めていた。

キリヤは自分で入れた紅茶をすすりながら赤石に話しかける。

「華族が絡んでたつてことは、やっぱり枢密院の決定だったんですかね」

切れ者の老人はキリヤの言葉を聞いて、いや、と言った。

「恐らくは軍部のお偉い方だろう。指令書はあるか？」

「はい、ここに」

キリヤは自分の机（隊長専用のデスクである）から、1枚の封筒を取り出した。

「これな、目標は貴族かもしれないし、そうじゃないかもしれない、一応傷は付けるなつてあるだろ？」

かなり意識しながら複雑な指令書を読み解く赤石。これは一種の暗号技術に近いのかもしれない。

「枢密院なら落ちぶれ華族を放っておくはずないし、軍部ならもともと華族に縁がない」

華族は軍人の血縁を嫌うからな、と付け加えて赤石は紅茶を飲む。薄い紙切れをひらひらさせながら、赤石はキリヤとネネに解説する。

まるでその様子は社会の仕組みを子供に教える教師のようでもある。

「枢密院の人たちが、婚姻関係を結んで華族になるってことですか？」

「そうだ。彼女が四代目でその次には時任は廃絶になる。だが、そ

れまでは特権は維持される」

つまり、華族であるカスミを巻き込みかねない雑な指令は枢密院によるものではないということ。

軍部は華族を利用して零番隊に責任問題を突きつけようとした訳である。

もしキリヤ達があそこでカスミに傷を負わせていれば、彼らの首は飛んでいたかもしれない。

キリヤが華族と聞いて嫌な顔をしたのも、まったく無理のないことだった。

「軍部つて、酷いですねえ」

カスミの髪を撫でながら、ネネはため息まじりに呟いた。

自覚の薄い部下をたしなめるように、キリヤは言ってみてやった。

「お前だって軍人だろうが」

「わたしは軍人じゃありません、零番隊の隊員です」

嬉しそうに言い返すネネから思わず顔をそらすキリヤ。赤石はそれを黙って見守っていた。

三 零番隊と皇太子（前書き）

またまた新キャラ登場。

そして物語は動き出します。

三 零番隊と皇太子

時任カスミの身柄をどうするか。それが新庄キリヤ目下最大の懸案事項である。

廃絶寸前とはいえ一応華族であるカスミだ、下手なところに預けたらその類は零番隊にも及ぶ。

かといって零番隊で預かるわけにもいかないし、時任の屋敷に戻すのも危険だ。

そもそもなぜ彼女が危険そうな男達に連れられていたのかも謎である。理由がまだはつきりしないのだ。

要するに扱いに困っているということ。そこでキリヤは仕方なくカスミとネネを連れて宮内府を訪れていた。

白大理石の廊下は人通りが少ないものの、宮内官がいなくなることはない。彼らは三人を見て眉をひそめる。

「キリヤさん、ぜーったい悪いこと考えているでしょう?」

上は瑠璃色で下は濃紺、腕章には零の文字とそれに寄り添うカササギの番いあしらわれている。

帝国魔術部の制服を着た少女は、先ほどから上官に向かって反抗的な態度を取っていた。

それを見てハラハラしているカスミは、喧嘩を止めるべきか本気で悩んでいる。

もっともキリヤは不機嫌なネネに対して慣れた対応をとる。要するに、適当にあしらうわけだ。

「悪いことは考えてねえ、カスミが無事保護されて晴礼宮さまは大喜びだ。何が悪いんだ」

「わたし、あの人苦手なんですよお。この間もお食事の誘いを断るの大変だったんですしー」

ネネはハァー、と大袈裟にため息をついてみせる。が、キリヤはそれをガン無視である。

「晴礼宮サマは皇位継承第二位のお方だ、有り難いことだとは思わないのか？」

「だったらどうしてキリヤさんは棒読みなんですかー？」

それから二人そろってため息をつく。キリヤもネネも、できればあのお方に頼りたくはないのだ。

「あの、晴礼宮様ってあの……？」

それまで蚊帳の外に置かれていたカスミが、キリヤにおずおずと尋ねた。

本来なら尋ねるといふより命令するのほうが正しい身分差なのだが、この少女は先ほどから萎縮しっぱなしだ。

キリヤはキリヤで、寝不足と気の進まない謁見が重なりそんなことにいちいちかまっていられない。

「あのっっていうか、晴礼宮時守ユキタダ殿下のことだな」

あくびまじりに皇族の名を出すキリヤに、宮内府の役人は当然いい顔をしていない。

更には汚れたコートを纏った見ず知らずの少女を連れてである、中には明らかな敵意を向けるものもいる。

しかしキリヤとネネはそんな視線を平然と無視する。舐められたら仕事がやりにくくなるだけである。

とはいっても限度と言うか、礼儀をまったく感じさせないキリヤはさすがにやり過ぎの感がする。

「あー、でもあの馬鹿皇太子は起きてるのか？」

「そーですよ！ まだ朝の8時ですよ、ユキタダ様だってまだ寝ていますよ、だから帰りましょう！」

「そんなことは無い！ ネネ殿が来ていると聞いてつい今しがた身なりを整えたところだ！」

そう言っつて侍従を置き去りにしたまま宮内府の廊下を走るの、この国の皇族様である。

あまりに急な謁見に、辺りの役人は衛兵を除いて皆慌てて平伏する。

さすがのキリヤとネネも頭を下げ、取り残されたカスミはキリヤに引つ張られて廊下に突つ伏した。

皇族の前にこうべを上げる事なかれ。洩垂れ小僧でも知っていることである。

「よい、ネネ殿にキリヤ殿。私が許す故頭を上げなされ！」

「恐れ多くももつたいなきお言葉、我らそのようなことを望みませぬ、どうかこのままに」

「私が良いと言っておろうが、さっさとネネ殿のお顔を見せてくれ！」

キリヤはお決まり文句に辟易しながら顔を上げ、ネネもそれに倣った。カスミだけは平伏したままである。

豪華な絹に黒貂の毛皮、靴は異国の鰐と呼ばれる生き物の鞣し革、頭に頂くのは珊瑚の冠。

帝国の第二王子・晴礼宮時守ユキタダは、その名に違わず威風堂々とした姿である。

「ユキタダ様はかように早起時間にお目覚めの上、このような場所に御労足いただきましては……」

「ええい、普通に話しなされキリヤ殿！ 様もいらぬか、それとネネ殿もじゃ！」

決定的な身分の差は簡単な挨拶も許さないが、当人達はそれをわざわざにする術を心得ていた。

それを言わせたキリヤは、ようやく諸官の前で皇太子にタメ口を聞ける。

いくら皇族相手でも、年下に敬語は使いたくないキリヤであった。「馬鹿に早えじゃねえか、ユキタダ。いつもあと2時間は寝てんじやねえのか？」

「ふん、ネネ殿が私に会いにきたのじゃ、これがどうしておちおち寝ておられるか！？」

「わたしは別にユキタダ様に会いにきたわけじゃありません！」

いつもの癖で敬語が飛んでいってしまったネネ。この皇太子相手

ではそれも仕方のないことだが。

つい強く否定してしまったネネに、大袈裟に驚いてみせるユキタダ。いちいちリアクションが大きいのだ。

「な、なんと……！ それではネネ殿はなぜ斯様な場所にいらしたのだ？」

「うっ、そ、それは……」

思わずキリヤの方を見遣り、それからその側のカスミに気づく。

「そうです！」

「そうか、やはり私の妃になりたいと！」

「違います、話は最後まで聞いてください！」

違い、の時点で卒倒しかけた皇太子を、侍従達は慌てて支える。

まあ、賑やかな皇太子ではある。

「零番隊だって暇じゃないんだ、空気読めよユキタダ」

「そうですよ、今日はこちらの時任カスミちゃんを保護していただくようお願いしてきました！」

その場にいた者達は皆、時任の名にピクリと反応した。ネネとキリヤはようやく本題に入ったかと思った。

そして、ユキタダ皇太子の表情が一瞬で引き締まる。

それは、国政の一翼を担う皇族の顔であった。

「ネネ殿、キリヤ殿、詳しくお話しくだされ」

それからキリヤは昨晚のことをかいつまんで話した。

カスミが何者かに拉致されていたこと、その相手も不明なこと、不自然な点の多かった指令書のこと。

ただし、軍部の思惑についてのキナ臭い憶測は伏せておいた。あまりに周囲の人が多すぎるからだ。

黙って聞いていたユキタダは、しばらく黙考してから口を開いた。「カスミ殿とやら、どうかお顔を上げなされ。曾爺を同じくするは

従兄弟も同然、何故かしこまる」

おずおずと顔を上げるカスミに目の高さを合わせ、ユキタダは膝をついた。

普通ならあり得ないその光景に、カスミはただただ驚くばかりだ。侍従や宮内官が色めき立つが、キリヤが目で制すると皆、すごすごと引き下がる。

恐れ多さに震えの止まらないカスミを優しく抱きしめる皇太子の姿は、妹をあやす兄のようでもあった。

「カスミ殿、難儀であった。其方の安寧はこの私が命に代えて守つてみせよう」

その言葉の力強さは、一国の支配者の血を引くにふさわしい堂々たるものだった。

それからユキタダはキリヤの方を見て、厳かに命じる。

「キリヤ殿、カスミ殿に狼藉働きし不埒者を必ずや捕らえてください」

ユキタダの胸で涙を流す少女を見て、キリヤは静かに頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1912h/>

帝国魔術部零番隊

2010年10月28日03時41分発行